

トランスポーター 2

2006(平成18)年6月11日鑑賞(道頓堀東映パラス)

★★★



監督=ルイ・レテリエ/製作・脚本=リュック・ベッソン/出演=ジェイソン・ステイサム
/アレックスandro・ガスマン/ケイト・ノタ/マシュー・モディーン/アンバー・ヴァレッ
タ/ハンター・クラリー (アスミック・エース配給/2005年フランス映画/88分)

……車をBMWからアウディA8に変えたものの、ジェイソン・ステイサム扮する「トランスポーター」=「運び屋」フランクのキャラは前作と同じ。今回の敵の狙いは、遺伝子組換え型のウイルスを使い、米大統領たちの首脳を殺害し、麻薬撲滅サミットをぶち壊すこと。「守れない約束はしない」。これがフランクの「ルール4」だが、さて彼は……？ カーアクションから水上スキーやジェット機まで、目もくらむようなアクションの切れ味は、偽装・偽装でイラつくあなたの欲求不満の解消にもってこい……？

リュック・ベッソン監督の二面性……？

リュック・ベッソン監督の記念すべき第10作目が『アンジェラ』(05年)だったが、これはあまり出来のいい映画ではなく、かなり失望……？ 彼の代表作は何と言っても、『レオン』(94年)と『ニキータ』(90年)だが、パンフレットには、今はやりの「ちょい不良(ワル)」をブームにつくりあげた雑誌『LEON』『NIKITA』の岸田一郎編集長が、トランスポーター=運び屋のフランク・マーティン(ジェイソン・ステイサム)をさまざまな角度から分析しているので、その道を目指す方は参考に……？

それはともかく、リュック・ベッソンという人は、監督としてまじめに作品に取り組む一面(?)の他、自ら設立した「ヨーロッパ・コープ」という製作会社による娯楽映画(?)もたくさんある。『TAXi』シリーズや『フィフス・エレメント』(97年)がその代表だが、最近では『ダニー・ザ・ドッグ』(05年)もそれ。

そんなリュック・ベッソンが前作の『トランスポーター』（02年）に続いて製作・脚本したのがこの『トランスポーター2』。激しいカーアクションを売りものにしたこの『トランスポーター』は、そのシリーズ化狙い（？）を含めて、リュック・ベッソン監督の二面性を示すもの……？

なぜ車種変更を……？

トヨタの最高級車「レクサス」はアメリカで売れに売れた人気車種となったため、2005年8月からは日本での販売に踏み切ったが、意外にも日本では今ひとつ……？ そんな中、高級車はやはり（西）ドイツ製とばかり、日本ではベンツ、BMWの人氣が抜群。

『トランスポーター』の主人公フランクはそのタイトルどおり「運び屋」で、高額報酬と引き換えにどんな（危険な）依頼品でも確実に目的地まで届けるプロ。そして、前作でつくられた彼のキャラは、ルール①契約厳守、ルール②名前は聞かない、ルール③依頼品は開けない、という3つのルールを絶対守るというプロの運び屋。そのプロの運び屋が乗っていた車はBMW750だったが、なぜか第2作ではそれがアウディA8に変更。どこにもその説明がないが、この車種変更はなぜ……？ ひょっとして、アウディ社の営業攻勢が、BMW社に勝ったの……？

リュック・ベッソン監督は、最近オナナの趣味が変わったの……？

「女優発掘能力」は、優秀な監督に必要な不可欠な能力だが、それが飛び抜けているのが、コン・リーやチャン・ツィイーを発掘した中国のチャン・イーモウ張藝謀監督。その能力に関してはリュック・ベッソン監督もなかなかのもので、その最大の成果が、『レオン』のナタリー・ポートマンと『フィフス・エレメント』『ジャンヌ・ダルク』（99年）のミラ・ジョヴォヴィッチの2人。もともと、この2人は好対照な素材（？）だが、リュック・ベッソン監督の趣味は最近、ミラ・ジョヴォヴィッチの傾向に極端に走っているよう……？ それで、『アンジェラ』におけるリー・ラスムッセンであり、この『トランスポーター2』でオードリー・ピリングスを演じたアンバー・ヴァレッタ。2人ともモデル出身だから当然かもしれないが、そ

の長身、とりわけ足の長さは驚くばかり……。リュック・ベッソン監督はそれをさらに強調した服装をさせているから、スクリーン上ではそれがなおさら……。

しかし、概して日本人男性は、小ぶりでかわいい女の方が好きだから（？）、こんな大オンナは苦手……。したがって、私としても、この手のモデル出身の大オンナの起用は、ほどほどにしてもらいたいものだが……？

フランクは既に引退……？

フランクの現在の活動舞台（？）はマイアミ。プロの運び屋であるはずのフランクが今やっているのは、ピリングス家の一人息子ジャック（ハンター・クラリー）の学校への送り迎え。前作でフランクに課せられた、縦150cm、横50cm、重さ50kg未満の「荷物」は、何と台湾生まれのベッピン女優、舒淇^{スー・チー}演ずる美女ライだったため、その「運び」には犯罪の臭いがプンプンしていた（『シネマルーム2』188頁参照）。

それに比べれば、フランクが今やっている仕事は、会社を定年退職した後、お抱え運転手として雇われたオジさんみたいな誰でもできるもの……。とても、「俺はプロのトランスポーターだ」などと、カッコ良く言えるような仕事ではない。フランクは既にプロのトランスポーターの仕事を引退したの……？

悪党たちのターゲットは？

しかしある日、フランクがジャックを定期検診のために連れて行った病院内で、大事件が発生した。ドクターや受付嬢に化けていた悪党たちがジャックを誘拐しようとしたのだ。危機を察したフランクは、何とかジャックを連れてその場を脱出し、ピリングス家の前までたどり着いた。しかし、「これでやっと安心」と思った途端にフランクのケイタイが鳴り、「子供の命が惜しければ、子供を指示した場所まで届けろ。女の指示に従え」との命令が。そして、アウディA8の側には、あの病院で、左右の手に持った銃を乱射していた、ハイヒールを履いた足の長い、まるでモデルのような女ローラ（ケイト・ノタ）が、銃を持って立っていた。追跡するパトカーとのカーチェイスを経て、やっとアウディA8は悪党のボス、ジャンニ（アレッサンドロ・ガスマン）のアジトに着いたが、そこで悪党た

ちはジャックの腕に緑の液体が入った注射を……。これは一体ナニ……。そして、悪党たちの狙いは……？

ジャックの安否を気遣う父と母

ジャックの父ジェファーソン（マシュー・モディーン）は、政府の高官。しかし、仕事が忙しく子供との接触が少ないため、妻のオードリー（アンバー・ヴァレッタ）とはあまりうまくいっていない様子。したがって、フランクがジャックを学校から自宅へ送り届けた時も、2人は夫婦ゲンカの真っ最中……。そんな両親の姿をジャックに見せないように気遣うという、意外に（？）繊細な一面を持っていたのがフランク。もちろん、フランクは外見的にも結構いい男だから、ストレスの溜まった美しい人妻オードリーは、つついグチを聞いてもらいたくなくて（？）、フランクの家を訪れたりも……。そんな人妻の誘惑（？）に対して、フランクはどんな対応を……。そんなちょっと色気含みの物語も設定されているが、それはあくまで観客サービスのための脇道だから、念のため……。

話を元に戻すと、いくら夫婦仲が悪くなっていても、一人息子が誘拐されたら、両親は息子の安否を気遣い、結束するもの。誘拐犯人からの身代金要求に対して「それもやむなし」と覚悟を決め、指定の時間に、指定の場所に行くと、犯人が約束したとおり、そこには無事なジャックの姿が……。これにて、誘拐事件が解決し、夫婦仲も回復し、一件落着となればよかったのだが……。

真の狙いはもっと恐ろしいもの……？

釈放され、その無事が確認された息子と抱き合う父と母。そんな感動的シーンを、側に立つローラとともにモニターで監視していたジャンニは、「もっと吸い込め……」と不気味な笑いを……。そう、警察から犯人グループの1人と見なされていたフランクが、ひとり調べ上げた結果判明したのは、ジャンニたちの狙いは身代金の獲得というチャチなものではないということ。ジャックの身体に注射された緑の液体は、遺伝子組換え型のウイルス、つまり、感染した人間はウイルス活性後24時間以内に死に至るとともに、空気感染で広まっていくという究極の殺人ウイルスという恐ろしいものだったのだ。

そして今、オードリーとジェファーソンには、怪しげな咳の症状が……。そのうえ今日は、ジェファーソンにとって晴れの大役の日。すなわち、アメリカ大統領とラテン・アメリカ6カ国の首脳たちが一堂に会する麻薬撲滅サミットに出席して発言しなければならないジェファーソンは、咳き込むのを我慢しながらその大役を無事果たしたが、その直後倒れ込み、急遽病院へ……。すると、ジェファーソンから空気感染したはずの各国の首脳たちの命は……？

フランクはどうするの……？

こんなパニックを解消するための方策は、ただ1つ。ジャンニが持つ解毒剤をすぐに入手し、感染者たちにそれを注射すること。しかし、単なるジャックの送り迎え役に過ぎなかったフランクが、プロのトランスポーターとしての契約条項に含まれていないそんな無報酬の仕事に命を賭けるのだろうか……？

フランクがジャックと約束したのは、「必ず君を守る」ということ。既にその約束が果たされた今、フランクは契約条項を無視してまで、プロのトランスポーターとしてのプライドを賭けた闘いに挑んでいくのだろうか……？ その場合、その前に立ちふさがるであろうローラやジャンニとの闘いはどのように？ そして、果たして無事に解毒剤を奪い取ることはできるのだろうか……？

『TAXi』に続いてシリーズ化……？

さらに大きなお世話ながら、既に引退したような子供の送り迎えという閑職に甘んじていたフランクに、新たにプロのトランスポーターとしての仕事が舞い込むのだろうか？ 弁護士の大増員時代を迎え、仕事にありつけない弁護士が生まれようとしている現在、私はそんな点にも興味が……。そして、もしそんな依頼の電話がフランクに入ってくれば、いよいよこの『トランスポーター』も、『TAXi』に続いてシリーズ化……？

2006(平成18)年6月13日記